写真１　潮州　祭灶神
農暦閏９月１日
（2014 年 10 月 24 日）

写真２　佛山市南海区　灶神　字牌
「定福灶君」

写真３　中山大学図書館

写真４　潮州　牌坊街

に同行することになり、その後も色々と私を助けてくれた。

潮州では劉先生の友人である李先生とそのご友人がずっと一緒にいて世話をしてくれた。急に潮州調査が決まった理由は、農暦閏９月１日の祭灶神を李先生が私に見せてくれるためであった。本来は閏月のため行わないものを、わざわざ私のために見せてくれたのである。豪華な供物を用意して。潮州は人も食べ物も芸術も非常に素晴らしい。私は潮州がとても気に入ってしまった。いつか機会があったらもっと時間をかけて調査してみたい。

次は、佛山市南海区の伊洛村で調査を行った。広州にある（農）村の人々の灶神を見たいという私の話を受けて、劉先生が博士課程の程さんの出身地を紹介してくれた。程さんの案内で程さんの実家や近所の家の灶神を見せてもらった。お昼は程さんの家でご両親と一緒においしい昼ご飯をいただいた。潮州でも伊洛村でもカメーカメー（食べろ食べろ）攻撃であった。お腹いっぱいと伝えても食べなさいと勧めるのは、ベトナムも沖縄も広州・潮州も同じであった。私はいつもと同じく断れず最後までひとりで食べ続けていた。伊洛村の調査は灶神だけでなく、中国の村を知るためにも非常に学ぶことが多かった。祠堂や土地神、屋敷神、、、ベトナムの研究をするためには中国の村や家を知ることは重要なのだと痛感した。

また、帰国の２日前には、佛山市龍江鎮の文化局の張先生に話を聞く機会を得た。ここは、私が図書館で地方誌資料を整理していて行きたいと思った場所である。ここもまた劉先生が連絡をとってくれた。残念ながら私の知りたかったことは得られなかったが、張先生からは貴重なお話を聞くことができた。私が現地調査できたのは全て劉先生のおかげだった。劉先生と会ったのはわずか２回、それも短い時間だった。にもかかわらず、いつも劉先生はチューターや先生の学部生たちを通して私の調査を色々と気にかけてくれていた。

調査でないときは博物館を巡り、それ以外はほとんど中山大学の図書館で過ごした。食事もほぼ学食。中山大学にいるだけで充実していた。なにより図書館が素晴らしく私のお気に入りの場所だった。窓側の緑の見える場所にいつも座っていた。この図書館も最初は利用カードを作るのに半日以上を費やしてしまった。チューターと２人がかりで手続きを済ませやっと利用できるようになった。学食用のカード作りには２日ほど労力を使ったが、結局断念してチューターの学生証を借りることにし、毎日学食を利用していた。

あっという間の３週間であった。色んな人にも出会えた。出発前に小熊先生や同じ博士課程の程さんが紹介してくれた方たちにも会うことができ、とても親切にしてもらい本当に楽しい時間を過ごした。中山大学で出会った言語研究者の日本人からも色々な話を聞かせてもらった。改めて出会った方々に感謝をしたい。この縁を大切にこれからの自分の研究に活かしていきたい。

サンパウロの熱と日系社会の温もりを感じたブラジル調査

松下　里織
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

海外移住資料館で展示ガイドをしている私にとってブラジルは憧れの国であり、また日本人移民の歴史の語り部として必ず一度はこの目で見なければならない場所だと思っていた。そのブラジル（サンパウロ大学日本文化研究所）へ非文字資料研究センターの若手研究者として行く機会をいただき、2014 年９月 24 日から３週間ほどサンパウロ調査を行った。

サンパウロ滞在中、私は毎日泣いてばかりであった。それは言葉が分からない国に来てしまったという不安などから来るものではなかった。ただただ、感激と感動で

涙が出ない日がなかったのだ。ブラジル在住の奄美大島出身者への聞き取りを目的としていた本調査は、予定していた語り手が高齢のため体調が優れないとの事で、もしかしたら調査が出来ないかも知れないという状況からスタートした。また、自国開催のW杯がようやく終了し、10月には4年に一度の大統領選挙を控えたブラジルの国内情勢は未だ不安定で治安が悪く、私の恐怖心も日々増していた。言葉の問題、治安の問題そして調査が思うように出来ないのではないかという不安を抱えて着いたサンパウロは、春を迎えあちこちで花々が咲き始めた美しい街だった。

到着してすぐに私を苦しめたのは、やはり言葉の問題だった。ポルトガル語で表記された洗濯機をどう扱って良いのか分からず、辞書を片手に洗濯機と格闘していたところ、ブラジル人の少女がどこからか現れた。彼女は身振り手振りで洗濯機の使い方を教えてくれ、洗濯が終わるまで私たちは一緒に筆談をも加えながら互いについて紹介しあった。彼女だけではない、スーパーの店員もタクシーの運転手も出会ったブラジル人は皆彼女のように人懐っこく親切だった。ブラジル人だけではない、ブラジルで出会った日系人たちもまた、とても親切だった。

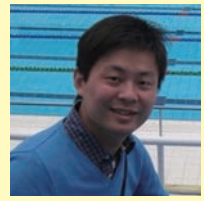
調査3日目、奄美大島出身のH氏との偶然の出会いが本調査に驚くような展開をもたらす。出会ったばかりのH氏に突然の聞き取り調査をお願いして話を伺っていた。突然のことで充分な聞き取りができず、後日改めて再調査をとお願いしたところ、これまたそばにたまたま居合わせたSさんがサンパウロから50キロ程遠方にあるH氏のご自宅まで連れて行ってくれると申し出てくれた。その有り難い申し出に甘えて、翌日Sさんの車でH氏のご自宅へ向かった。途中Sさんのご自宅にも立ち寄らせていただき、ブラジルで一、二位を争う規模というSさんの蘭栽培場を見学することができた。その後H氏のご自宅に到着し、H氏の営む仕出し工場を見学後、H氏のご家族と会食、そのままご自宅に宿泊させていただいた。H氏は仕出し料理会社の他に花卉栽培も営んでおり、翌日は中央卸売市場のH氏の店舗で花卉販売の手伝いをさせてもらった。それだけではない、H氏には多くの奄美大島出身者を紹介していただき、予定していた以上の聞き取り調査を行うことができた。さらに私の歓迎会として奄美大島出身者とその家族たちをご自宅に呼んで盛大な食事会を開いてくださった。H氏やその友人たちのおかげで調査だけでなくサンパウロ滞在の素晴らしい想い出もできた。

また、当初聞取りを予定していた奄美大島出身者にもお会いすることができた。こちらもT氏という奄美大島宇検村出身の方が、彼の一族と宇検村出身の人々を集めて食事会を開催してくれたおかげで、調査を行うことができた。

このような温かいもてなしは奄美大島出身者だけではなく、サンパウロで出会った全ての人々から受けた。毎日、毎日、ブラジルの人々の優しさにふれて、感動で涙が出ない日はなかった。人から人への温かい優しさの繋がりのおかげで、調査を無事に終えることができた。わずかな経験だがこれまでも各地で聞き取り調査を行ってきた。しかしここまで多くの人々の協力を得られた調査は初めてだった。まさに奇跡の連続としか形容しようのないブラジル調査であった。サンパウロでの日々を思い出すと今でも涙が出る。この人々の優しさに支えられて出来た調査の成果を必ずブラジルの人々にお返ししなければ、と思う。ブラジルで出会った全ての人に、言葉では言い表せないほど感謝している。Eu agradeço. Muito obrigada por tudo!

セントラル・ユピックの狐仮面と狐伝承について—UBC図書館と人類学博物館の調査報告

程　亮
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）



2014年10月17日から11月3日まで、非文字資料研究センターの若手研究者として、カナダバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学（The University of British Columbia、略称UBC）アジア学科を訪問し、欧米学者による東アジアの狐伝承に関わる文献を調査、また各地域社会の狐伝承の実態を明らかにすることを目的として、UBC人類学博物館（UBC Museum of Anthropology、略称MOA）で北米先住民の狐の仮面及び仮面踊りに関して調査を行った。

まず、バンクーバー公共図書館（Vancouver Public Library、略称VPL）とUBC図書館で狐伝承に関わる文献調査を行った。VPLはバンクーバーにあるカナダ第三の規模を誇る市立公共図書館で、130万点以上の蔵書を所蔵している。UBC図書館はカナダで第二の規模を誇る研究図書館で、中央図書館と分館合わせて23号館の中に合計で590万冊以上の蔵書などを所蔵している。今回は、VPL、UBCバンクーバーキャンパスにあるWalter. C. Koerner Library、Irving K. Barber. Learning Centre、Asian Libraryの4館を中心に調査した。日本の狐伝承に関わる主な研究に、Kiyoshi Nozaki（1961）『KITSUNÉ:Japan's Fox Mystery, Romance & Humor』、Karen A. Smyers（1999）『The Fox and the Jewel：